

鳥居龍蔵記念博物館 NEWS LETTER

8

2025 Autumn
Tokushima Prefectural
Torii Ryuzo
Memorial Museum



今季の逸品

鳥居龍蔵の調査に同行した画家・大野延太郎（雲外）のスケッチ

1895（明治28）年4月に鳥居龍蔵の埼玉県内調査に同行した、大野延太郎（おおののぶたろう 1863－1938）のスケッチです。大野は、東京帝国大学人類学教室に所属した画家で、後に考古学に興味を持ち、鳥居と共に調査を行うようになりました。

スケッチ左下に記された大野のメモ書きによれば、吉見百穴（よし み びゃくあな 埼玉県比企郡吉見町に所在する古墳時代の末期の横穴墓群。1923（大正12）年に国の史跡に指定）を調査した後、帰路につく鳥居ら一行を描いたものであることがわかります。調査時の服装など、当時の様子を伝える貴重な資料です。

（下田順一）

鳥居龍蔵が調査した中国貴州省の現在

—企画展「中国西南部の旅人たち」に何けて—

はじめに

鳥居龍蔵（1870－1953）は19世紀末から20世紀前半に、日本列島を含む東アジア各地で多くの調査を行いました。そして、鳥居がこの世を去ってから今日に至るまでに、70年以上が経っています。かつて彼が調査した地域は現在どのようになっているのでしょうか。ここでは、中国の貴州省^{きゅうしゅうしょう}を例にとってみましょう（図1）。

鳥居は1902年7月から1903年3月の間に、貴州省、雲南省^{うんなんしゅう}東部、四川省^{しせんしゅう}南部を旅し、苗族^{ミャオ}や彝族などの少数民族について調査し、ノートや写真などの記録を残しました（図2）。

筆者は今年（2025年）の6月下旬から7月初頭にかけて貴州省を訪れ、鳥居の記録に現れる貴州省の様子と、現在の様子を比較することができました。

現地の交通状況

鳥居が貴州省を調査した頃と現在を比べた時、大きな変化として挙げられるものの一つは、交通インフラの状況です。

鳥居が調査した頃の移動手段は、徒歩、馬、あるいは駕籠^{かご}でした。また、道路はあっても、舗装^{ほそう}が十分ではない場合も少なくなかったでしょう。鳥居は荷物を運ぶために、現地で人夫を雇っていたものの、調査用機材を持った状態で移動することは、多くの苦勞を伴うものだったはずです。

それに対して現在では、近年の中国における経済発展を背景として、自動車道や鉄道が張り巡らされています。そのため、列車やバスを乗り継げば、山の中にある目的地にも行



図1 中国周辺地図
着色した部分が貴州省です。



図2 鳥居龍蔵が調査した頃の苗族^{ミャオ}（当館蔵）



図3 貴州省のカルスト地形
貴陽市近郊の青岩古鎮^{せいがんこちん}にて（2025年6月、筆者撮影）

けるようになっていました。列車やバスの車窓から、貴州省の各地に見られるカルスト地形(図3)を眺めると、山々を越えて移動していた鳥居の苦勞^{しの}が偲ばれます。

街の風景

現在の中国では、人口の約9割を占める漢族のほか、55の少数民族が政府によって公認されています。そして貴州省は、少数民族の人口が多い地域の一つです。同省の2024年における人口は3,860万人とされており、その内の約3分の1を少数民族が占めています。そのため、少数民族と思われる人々と接する機会は、しばしばありました。ただし彼ら全員が、日常的に民族衣装を着ているわけではありません。年輩の人々であれば、民族衣装を着ていることが比較的多かったのですが(図4)、若い世代の人々ほど、洋服での生活が一般的になっているようです。もっとも、洋服を着ている一方で、伝統的な髪^{あし}の結い方をしている人もいましたので、個々人がその時々に応じて装いを選んでいるのが実情ではないかと思われます。

また、貴州省の安順市^{あんじゅん}を訪れた際は市場が立っていました(図5)。鳥居龍蔵が中国西南部を調査した際の記録にも、少数民族を含む多くの人々が、市場にやって来ていたことを伝える部分があります。

おわりに

このように見てみると、現在の貴州省で見られる光景は、鳥居が調査をした時代から変化している部分が多いです。その理由の一つは、交通インフラの整備によって、人々の往来が以前とは比べものにならないほど活発になったことだと思われます。他方で、民族を問わず多くの人々が市場に集まる光景は、鳥居が調査した頃と最も近いものだったのかもしれませんが。現在準備中の開館15周年記念企画展「中国西南部の旅人たちー高原の少数民族と鳥居龍蔵ー」(会期：2026年1月31日～3月8日)では、鳥居龍蔵の関連資料に加えて、現在の中国西南部の様子についても紹介します。

(坂東 泰)



図4 民族衣装を着た人々
青岩古鎮にて(2025年6月、筆者撮影)



図5 市場の様子
安順市にて(2025年6月、筆者撮影)

1922年の鳥居龍蔵による 徳島調査と弥生時代研究

はじめに

鳥居龍蔵は、1922（大正11）年3月27日から4月4日まで徳島県内に滞在し、現在の東みよし町、三好市、徳島市、鳴門市、藍住町、小松島市の順に巡り、貝塚や古墳、城跡などのフィールドワーク（以下、「徳島調査」という）を行いました。

徳島調査の目的は、石器時代の遺跡を確認することでした。調査の過程で、吉野川中流域調査の三好市三野町や美馬市脇町などを訪れていますが、それは、石器が採集される散布地として地元で知られていたためと考えら

れます（写真1）。ただし、鳥居が三野町や脇町の石器散布地をどのように位置づけたかは判然としません。ここでは、1922年の徳島調査を紹介するとともに、とくに三野町勢力の遺跡と遺物について、現在の弥生時代研究の成果をもとに考えます。



写真1 鳥居が三野町勢力付近で実施した調査の様子

徳島調査の目的と成果

鳥居は1917年に実施した国府遺跡（大阪府）などでの調査成果から、「固有日本人」（大陸から渡来し、日本人の主なルーツになったと鳥居が考えた人びと）が「弥生式土器」と石庖丁や磨製石斧などの石器を併用したと考えました。さらに、1918年から1923年に『諏訪史』編纂のため実施した信州調査においても、「弥生式土器」やそれに伴う石器に注目しています。つまり、鳥居は「弥生式土器」と石器が同じ地点で出土することが「固有日本人」の存在を裏付けるものとして、重視していたことがわかります。

徳島調査は信州調査と同時期であり、鳥居独自の日本人起源論である「固有日本人」論の観点から行われたと考えられます。鳥居は三野町や脇町を訪れ、石器だけでなく「弥生式土器」の存在を確認するとともに、それらを採集しました。この時点で、鳥居は自説に沿った成果を得ることができたとみられます。

しかし残念ながら、鳥居が採集した石器や「弥生式土器」については、現在ではほとんどわかりません。そこで、鳥居が調査した三野町勢力にある遺跡や遺物を参考に推定してみましょう。

三野町勢力の遺跡と遺物

三野町勢力には、1990年代の発掘調査によって詳細が明らかになった集落跡があります。その代表的な遺跡としては、大谷尻遺跡と丸山遺跡があります（写真2）。大谷尻遺跡は、弥

生時代後期における^{こうちせいしゅうらくあと}高地性集落跡です。また、周囲に^{かんこう}環濠があることから、外敵から守る必要性に迫られた集落であったと考えられています。弥生土器や石庖丁、磨製石斧、^{せきぞく}石鏃などの石器のほか、食用と考えられるコメやリョクトウの^{しゅじつ}種実が出土しています。一方、丸山遺跡は弥生時代中期から後期の高地性集落跡で、大谷尻遺跡の西隣に位置しています。大谷尻遺跡より長い期間存続したようです。

遺跡からは、弥生土器や石庖丁、石斧、石鏃、^ひ翡翠製^{すいせい}勾玉^{まがたま}などが出土しました。

次に、三野町で出土した遺物について注目してみましょう。昭和初期に地元住民によって三好市三野町の勢力とその周辺で採集され、平成になって徳島県立博物館に寄贈された石器があります(写真3)。その大半はサヌカイト製の石鏃ですが、鳥居が「弥生式土器」に伴って出土する^{ふと}大型^{がたはのぼ}蛤刃^{せきふ}石斧や石庖丁などの磨製石器も含まれており、この地域における石器の散布状況を把握する

上で参考になります。これらの石器は、大谷尻遺跡と丸山遺跡から出土した石器とは種類や形状に大きな差がないことから、弥生時代中期から後期にかけての石器の可能性あります。

以上のことから、鳥居が三野町で採集したとされる石器にも、同じ時期のものが含まれていたと考えられます。

おわりに

徳島の弥生時代中期は、鉄器や^{かじろ}鍛冶炉の導入、^{すいぎんしゅ}水銀朱の生産、瀬戸内地方や近畿地方の影響を受けた墓の出現、^{どうたく}銅鐸^{まいのう}の埋納、集落数の急増など、様々な変化が生じた時期です。それは、吉野川下流域や那賀川流域の事例によって示されるものですが、鳥居が調査した三野町や脇町などの吉野川中流域は様相が異なるようです。

鳥居が徳島調査を実施した大正時代には、「弥生式土器」の位置づけが議論され、「弥生時代」の概念が整えられていきました。それから100年以上経過した現在、鳥居が調査した三野町周辺では、弥生時代中期から後期の遺跡・遺物の存在が知られるようになるとともに、県内の他の地域とは状況が異なることが判明してきました。

引き続き、鳥居による徳島調査の実態を明らかにするとともに、徳島の弥生時代研究にも寄与していきたいと思ひます。

(植地岳彦)



写真2 丸山遺跡と大谷尻遺跡の現在の様子



写真3 三野町で採集された石斧
(徳島県立博物館蔵)

フィールドノート「那賀のあら妙」 に描かれた七夕飾り

七夕は五節供^{たなばた ごせつく}のひとつで、現在は7月7日（月遅れで8月7日に行う地域もある）に行われる年中行事です。織女^{おりひめ}と彦星^{ひこぼし}が天の川^{あまがわ}を渡って会うという伝説が知られています。また、七夕は水神を祭り、機織^{はたお}りの上達を祈願する行事とされてきました。

この七夕に関して、鳥居龍蔵は、そのフィールドノート「那賀のあら妙」に調査記録を残しています。これは、徳島県の七夕に関する調査記録として、もっとも古いものと言えます。ここでは、そのスケッチ「一五三のシメ」（図1）について、読み解いてみたいと思います。

同フィールドノートの1901（明治34）年8月20日の項に、現在の徳島県那賀町^{な かちょう}での七夕に関する調査記録があります。この日を旧暦（太陰太陽暦）に読み替えると7月7日で、七夕の祭日にあたります。

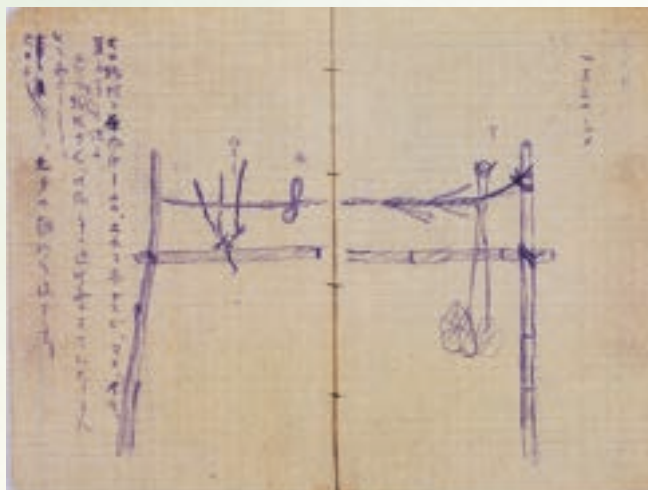


図1 七夕飾りとしての「一五三のシメ」

鳥居らは、調査行程のなかで偶然にも七夕飾りを発見する機会を得たのでした。

彼のスケッチに描かれた注連飾りは、右から「芋」の葉を逆さに結びつけ、中程に「麻」（楮糸^{あさ こうぞ}のことを指す）を輪状にして結びつけ、左側「銭さし」を3本取り付けるという構成です。これについて、鳥居と同行した玉置繁雄^{たまき しげお}は「阿波国木頭山土俗」のなかで詳細に言及しています。それによれば、那賀町成瀬^{なる せ}では、旧暦7月6日には天の川の見える場所に祭場を設け、図1の注連飾りの下に設置した台上に瓜、茄子、菓子などを供え、翌7日に川に流すとされます。また、この日は食事をひかえる日とされていましたが、瓜を好む彦星はこっそりこれを食べて罰せられ川に流されたところを、長くつぎ足した「楮糸」を織姫が川に流して救ったと伝えられています。こうした由来から、織姫のように機織りが上達するよう、七夕に祈願する風習が生まれたとされます（玉置、1902）。

それからおよそ40年が経過した1938、39（昭和13、14）年頃の七夕行事の記録として、次の記述があります。短冊状に切った色紙に願い事や名前を書き祈願するほか、女兒は裁縫^{さいほう}の上達を願い「かせ」（糸を束にして巻いたもの）を笹に掛け、茄子や里芋、団子を供えて庭先に飾り、これを翌朝川に流したとされます（上那賀町誌編纂委員会、1982）。注連飾りではなく、笹が用いられるなど、鳥居らの調査時とはやや異なる内容です。

現在では、七夕の習俗やそれに伴う伝承について、現地で確認することは難しくなっています。だからこそ、20世紀初頭の鳥居らによる調査記録は、地域文化を知るうえで貴重な資料となり得ると言えます。

（磯本宏紀）

〈引用文献〉

上那賀町誌編纂委員会 1982 『上那賀町誌』 徳島県那賀郡上那賀町
玉置繁雄 1902 「阿波国木頭山土俗」『東京人類学会雑誌』 190

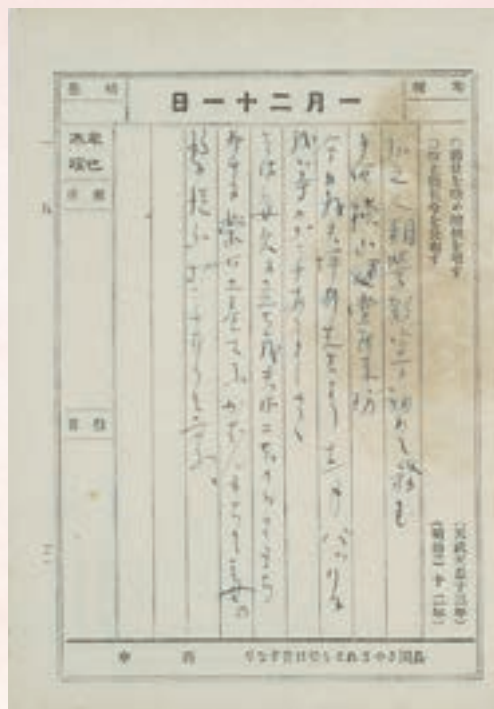
鳥居きみ子と龍蔵のモンゴル行きについて — 夫婦の共有日記をもとに —

「今日我夫坪井先生より十二月バックに我等のポンチあるよしきく。そは妾先に立ち我が夫は二本のかさもち、片手に蒙古土産でふかばんもちて妾の後に従ふポンチなりと云ふ。」

この記述は、『鳥居龍蔵日記』1909（明治42）年1月21日付のものです。この日記帳には龍蔵による記述と妻きみ子による記述が混在し、夫婦で日記帳を共有していたことがわかります。上記の記述を説明すると、以下ようになります。今日龍蔵が師匠^{つばいしやうごろう}の坪井正五郎から1908年12月のバック（『バック』という雑誌のことか）に鳥居夫妻の「ポンチ」（風刺画）が掲載されていることを聞きました。そして、その内容は「妾」（妻きみ子）が夫龍蔵の先に立ち、龍蔵は荷物持ちとしてきみ子の後に従っているという風刺画だといえます。

1906年、きみ子は河原操子^{かわはらみさこ}の後任の日本語教師として、モンゴルのカラチン王府にあった女学校へ赴任します。その後龍蔵もモンゴルへ赴きますが、夫妻は出産のため一時帰国し、生まれたばかりの赤ちゃんを連れて、再びモンゴルの地を踏みます。おそらく風刺画は、この鳥居夫妻のモンゴル行きを描いたものであると考えられます。

明治時代は、女性の社会進出の機会が極めて限定的であり、「良妻賢母」や「内助の功」という考えがもてはやされ、女性は男性の後に従うべきものという考え方が一般的でした。このような時代背景に対して、坪井が見たという風刺画は、妻のきみ子が夫の龍蔵を従えているものであったようです。残念ながら、この風刺画は確認できていませんが、当時の「あるべき」男女の関係性の逆転が見られ、そのことを風刺したのでしょう。この風刺画を見た坪井は、しゃれやユーモアが大好きな人物でした。日記の記述はわずかであり、坪井がどのような意図でこの風刺画の存在を龍蔵に伝えたのかはわかりませんが、世間から鳥居夫妻が特異な関係性にあると認識されていたことを知ることができる、大変興味深い内容といえるでしょう。（小林篤正）



『鳥居龍蔵日記』1909年1月21日付の記述
龍蔵の日記帳だが、この日はきみ子が記している。

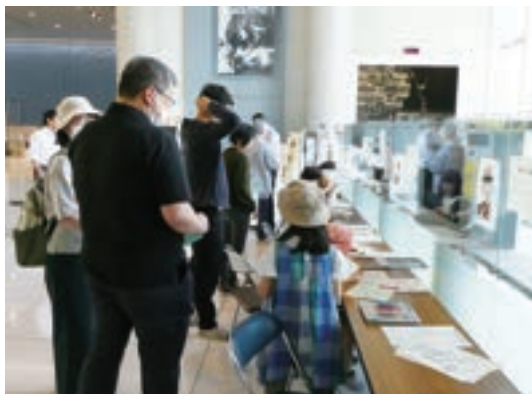


モンゴル出発前の鳥居一家

鳥居龍蔵記念博物館の普及行事について

今年度の上半期に実施した当館の普及行事と、下半期の予定をお知らせします。

- ＊ ＊
文化の森こどもの日フェスティバル（5月5日）
文化の森サマーフェスティバル（8月11日）



フェスティバルでは、鳥居龍蔵の活動にちなんだパズルやすごろくに挑戦するコーナー、鳥居風の仮装ができるコーナーなどを設けました。

- ㊦
令和7年度 鳥居龍蔵セミナー



当館の学芸員らが取り組む研究テーマについて、わかりやすく解説する連続講座です。写真は、第1回「鳥居龍蔵の中国西南部調査と清末知識人」（5/18）の様子です。

- ／／／
夏休み自由研究スペシャル
「みんなで発見!! 鳥居龍蔵を知ろう!!」（8月3日）



小学校5・6年生を対象として、夏休み自由研究の課題としてもらえるよう、鳥居龍蔵について紹介する行事です。児童と保護者の計6名が参加し、展示をとおして、鳥居龍蔵の生涯について学びました。

下半期の予定

- 鳥居龍蔵セミナー 第5回（10月19日（日））
- 文化の森秋祭り 11月3日（月・祝）
- 開館15周年記念企画展
「中国西南部の旅人たち
—高原の少数民族と鳥居龍蔵—」
1月31日（土）～3月8日（日）
- 文化の森ウィンターフェスティバル
2月11日（水・祝）
- 鳥居龍蔵記念 徳島歴史文化フォーラム
2月14日（土）
- 鳥居龍蔵記念 全国高校生歴史文化フォーラム
2月15日（日）
- 鳥居龍蔵ゆかりの地を歩こう 3月22日（日）

鳥居龍蔵記念博物館 NEWS LETTER No.8

発行年月日 2025年9月30日

編集・発行 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館

〒770-8070 徳島市八万町向寺山（文化の森総合公園内）

TEL 088-668-2544 FAX 088-668-7197

<https://torii-museum.bunmori.tokushima.jp>